

国立公文書館所蔵「江戸図」解題

高橋 喜子

はじめに

本稿は、国立公文書館（以下、当館）所蔵の資料のうち、内閣文庫に由来する資料の中から、江戸図の写本を中心に、書誌情報及び内容等を紹介するものである。ここでいう「江戸図」とは、江戸及び江戸周辺地域を描いた絵図を指す。江戸図は、写本、刊本を合わせると膨大な量が現存し、各地の図書館、博物館、資料館等に所蔵されている。当館においても多数の所蔵が確認される。研究史も厚く、江戸図の種類や特徴については、飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』、『古板江戸図集成』等、先行研究によって、その概要が詳らかされている。特に、江戸図の刊本については、各地に同様の絵図が存在し、その詳細が判明している。一方、江戸図の写本については、刊本の写しの他、写本として伝来し各地に写しが存在する資料、一点物の資料等が混在しており、中には伝来の過程や使用者の書き込みをみることで資料もある。当館にも多数の江戸図の写本を所蔵しているが、その詳細は明らかにされておらず、利用の便を図る上でも、ここに解題を掲載する意味があると考える。

そこで、本稿ではすでに概要が明らかにされている刊本は基本的に検討対象から外し、当館所蔵の江戸図の「写本」（刊本の写しも含む）に注目して解題を掲載する。なお、武州豊嶋郡江戸庄図、長禄年中江戸絵図につい

ては、諸本の比較検討の必要から、刊本についても取り上げた。調査対象資料は、『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「地理（城図）」及び当館デジタルアーカイブ（以下、DA）から抽出した。DAでは、「江戸 and 図」を検索語として使用し、対象資料を抽出した。

【書誌】について、資料一件につき複数点の資料がある場合には、資料の冊次に基づき、①、②等の番号を用い、それぞれ区別して記載した。なお、一件に複数点の資料があるが、表紙、外題等が同様の場合には、表紙、外題等はまとめて記載した。「旧番号」とは、旧整理番号を指し、資料に添付されたラベル、もしくは資料の印記に表示されている。なお、資料において旧字体ないし異体字で表記されている場合、基本的に新字体に直して表記した。また、【書き入れ】等の資料引用の際には、資料の可読性を考慮し、適宜句読点を補った。

【解題】について、複数点存在する武州豊嶋郡江戸庄図、慶長江戸絵図、長禄年中江戸絵図は、初出の際に絵図の概要を記し、以降は当該資料の解題のみを掲載した。主な参考文献の書誌情報は文末に記すことにし、解題においては、標題あるいは著者と刊行年のみ記載する等、表記を略した。

〔二〕明和九年江戸目黒行人坂大火之図 「請求番号 一六六・〇四〇六」

【書誌】

〔外題〕「明和九年江戸目黒行人坂大火之図」（中央双边題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕香色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕六三・五×九九・一糎（折畳時二五・〇×一六・〇糎）

〔年代記載〕「明和 新刻 毎月改正」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 二八六九九号

〔備考〕模写本、手書彩色、雲母引、DAにて資料画像公開

【書き入れ】

明和九年辰二月廿九日午刻方同晦日酉刻迄、火元目黒形人坂天台寺方出火ス、絵図之通、富士南風ニ而吹高上ル、卅日中やミのことしくらし

類焼御大名方御屋敷百七拾式ヶ所、其外町々橋々焼落敷不知、御見附九ヶ所焼失、はた元やしき敷不知、諸宗寺々敷不知

外ニしれぬ人五千余人、凡人死ス、五千余人焼失也

【奥書】

御紋 御上屋敷、■印 御中屋鋪、●印 御下屋しき

黄色ハ道筋、紅ハ寺社等、草色ハ^{山原}、あい色ハ^{海川}、

新板江戸安見絵図所々御屋鋪等御名之替り、

或ハ新御屋敷迄も此度改正いたし再板行仕候、若

相違之儀も御座候ハ、御知らせ可被下候、早速相改可申候、以上

明和 新刻 毎月改正

江戸芝明神前 奥村喜兵衛 板

【解題】

明和九年（一七七二）の大火の類焼範囲の図。目黒行人坂（めぐろぎようにんざか）から出火したことから、目黒行人坂の火事ともいう。明和九年の大火は、明暦三年（一六五七）の大火、文化三年（一八〇六）の大火と並ぶ江戸の三大大火の一つ。明和九年二月二九日、目黒行人坂にある大円寺（天台宗）から出火し、南西風にあおられて、各地へ飛び火した。本資料は、江戸芝明神前の奥村喜兵衛から刊行されたものを模写した図。類焼範囲は橙色で色付けされ、資料の余白には、火事の状態などについて書き込みがある（書き入れ）。この他、資料右下には、「江府内外を分傍示乃場所」（江府内外を分ける傍示の場所）、「日本橋方諸方道法」（日本橋から諸方までの距離）と題した一覧が掲載されている。

〔二〕武州新堀古城之図 「請求番号 一六九・〇二九二」

【書誌】

〔外題〕「武州新堀古城之図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「武州新堀古城之図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕焦茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三八・三×五三・八糎（折畳時一九・一×九・〇糎）

〔年代記載〕【書き入れ②】、【書き入れ③】 参照

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二七五五七号

〔備考〕手書彩色、虫損部修復跡あり

【書き入れ①】（内題他）

武州新堀古城之図

太田道漢持資之城也

今謂道漢山

【書き入れ②】

宝永二己酉年四月十九日 書之從近藤季満
子借之 江龍日復卿能
宝曆七丁丑年八月十九日 竹溪源義堯模写
安永四己未年五月十六日 加賀美遠清模写
安永七戊戌年三月十三日 瀬名貞雄模写
寛政三辛亥年十月七日 中根正映写

【書き入れ③】

深谷栄真以蔵所
縮写

明治八年三月 課長岡谷繁実督（印） 校合 吉村巖（印）

林八郎（印）

【解題】

太田道灌が築いたとされる城の古城図の写本。宝永二年（一七〇五）に書写されて以降、何人もの人々の手によって、書き写されてきたものである（【書き入れ②】、【書き入れ③】）。最終的に、明治八年（一八七五）三月、内務省官僚であった岡谷繁実らによって縮写されたものが伝わっている。

〔三〕長禄年中江戸図 「請求番号 一六九・〇二九四」

【書誌】

〔外題〕「大田道灌武城初築旁近古図全」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕量物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四〇・〇×五四・五糎（折畳時二四・〇×一六・七糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「内閣文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二八八四九号

〔備考〕手書彩色

【書き入れ】

疇昔太田道灌法師武城築之時之絵図而世々所伝于藤原直朗朝臣家也、爰秋田隠士晩得翁偶以所持姫路侍従家之模図贖之云云、予頗懇望而伝写畢、仍永蔵文庫而已

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。同図は太田道灌が城を築いた長禄年間（一四五七～一四六〇）の江戸の様子を描いたとされる絵図。「長禄年中江戸図」、「長禄江戸図」、「長禄絵図」等の名称が存在するが、本稿では「長禄年中江戸絵図」に統一する。長禄年中江戸絵図は、安永七年（一七七

八）以後突然に写しが出現し、古い伝写がないこと、日比谷入江、江戸前島がないこと、慶長二年（一六〇六）に完成した溜池が描かれていること等、不自然な点が多いことから、後世に創作されたものと考えられている。各所に数多くの写本が残されており、当館でも複数点（本稿「五」、「八」、「二五」、「二六」、「二七」、「二八」、「二九」、「三〇」、「三二」）を所蔵している。

当館所蔵の本図は写本で彩色はほとんど見られないが、街道は朱筆であり、寺社の建物を示した図にも赤い色が施されている。また、図の余白に朱筆の書き込みがあり、この図の来歴について記されている。それによれば、これは太田道灌が築城した時の絵図であり、藤原直朗家に伝わったもので、秋田隠士晩得翁（佐藤晩得か）が、姫路侍従家の模図を贖写したものを偶然に所持しており、それを懇願して書写したとある。

〔四〕江戸市塵地図（『日本輿地図』所収）

〔請求番号〕一七七・〇〇〇一（二四九）

【書誌】

〔外題〕「日本輿地 郡県部 江都本町図」（中央双边題簽に墨書）

〔内題〕「日本輿地 郡県之部 江戸市塵地図」

〔裏書〕なし

〔形態〕量物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕浅葱色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三八・四×七六・八糎（折疊時二五・八×一九・四糎）

〔年代記載〕【奥書】参照

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「明治十一年購求」、「地誌備用図籍之記」、

「上京第貳拾区下立売通小川 矢倉」

〔収納容器〕四方帙 青鈍色 疊紙 五八・五×五一・〇糎

（折疊時二六・〇×一九・五×二・〇糎）

〔山陰道之部 四冊〕（中央無刃題簽に墨書）

〔第一四〕（中央直書墨書）

印記「上京第貳拾区下立売通小川 矢倉」

〔旧蔵者〕太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六一五九号

〔備考〕手書彩色

【書き入れ①】

○相ヒ伝フ江戸之地ハ者。関東ノ公方足利家ノ重臣。上杉氏ノ徒衛。太田道灌入道ノ之所ニ興基スル一而シテ慶長年間。台徳院殿秀忠公大ニ拓益シテ其城一居住シ玉フ。以降江戸ノ繁華タル為天下第一二所謂ル天府トハ即是ナリ。

○此ノ図者ハ高橋氏之所貯フル今予写ス焉。以ナリ三町割為ニ鮮明一。所ハ図スル其ノ昔ノ所ニシテ分ルレ町ヲ而江戸町街之本町ナリ。日本橋ノ南北ニシテ而北ハ斜橋ヨリ至南ノ芝口御門ニ一也。開板スル書林ノ一江戸ノ図多シ。皆分間ノ地図ナリ。雖レ然ト町条悉ク以スニ黒線ヲ一故ニ町名俱ニ難シニ見分ニ此図ハ者。両・線ニシテ而其ノ中ニ載ニ町名ヲ一故ニ一閱容易ナリ也。按ルニ此ノ図ハ者見ユ室永正徳享保間ノ図ト一現然今尚用テ之ヲ無ニ相替ルコト一

粗改ニ入名一耳。所謂ル江戸ノ諸区非スニ此ノ図ノ限ニ。周二百東北西南ニ而鉄炮津深川本庄本江下谷谷中染井駒込曹子谷小石川牛込市谷四谷赤坂麴町青山浅生白銀西久保三田芝本榎ノ木高縄等。其ノ太広阡陌ノ通街衛民ノ第一屋不レ可ニ勝計一。其ノ広隘譬フルイニ八一倍ノ京師ニ一倍ノ倍スト大坂ニ。然レハ京都ハ保二江戸十分ノ之二一浪華ハ保ツニ江戸十分ノ之一ヲ一誠ナル哉麴町近辺ノ広相一同大坂ノ闊地ニ一。

【書き入れ②】

○世ニ弘ニ行フ書林ノ一江戸ノ図多シ焉。当時江都出雲寺和泉椽之所ノ鐫江戸ノ地図尤モ為ニ詳密一。故ニ用ヒテ其ノ図ヲ一未レ著惣江戸図一模シテ此ノ本町ノ図ヲ閱スルノミ町区ヲ一而已。

【奥書】

宝暦七年丁丑二月十四日撰州大坂生玉ノ寓菴森幸安摸図

【解題】

江戸城の東、日本橋を中央に、筋違橋、和泉橋、浅草橋、両国橋周辺から南へ、山下門、芝口門（新橋）までの領域を描いた絵図。町人地、武家地が色分けされ、町割りが詳細に記されている。余白には、図を写した経緯や刊行されている江戸図についての所感が述べられている。それによれば、この図は高橋氏所蔵の絵図を写したとあり、その理由は町割が鮮明な図であるからだという（書き入れ①）。奥書には、宝暦七年（一七五七）に大坂生玉に住む森幸安が模写したことが記されている。森幸安は江戸時代中期の地図考証家で、多数の日本地図を模写、収集し

た。

絵図には「芝口御門」の記載が見える。芝口門は、宝永七年（一七一〇）正月、朝鮮通信使の来聘にあたり、元は「新橋」と呼ばれていた場所へ新造され、新橋は芝口橋へと名称を改めた。しかし、享保九年（一七二四）正月の火災で焼失して以後は再建されず、石垣も撤去され、橋は「新橋」の旧称に復した。従って、絵図の内容年代は、芝口門が存在した、宝永七年〜享保九年頃であろう。

本図は『日本輿地図』の中の一枚であり、当該資料については『内閣文庫百年史』に解説が掲載されている。それによれば、同図は明治十一年（一八七八）に内務省地理局が購入したもので、明治三年に内閣文庫へ移管された。当初は紺色の畳紙を包紙として資料が分収されていたようだが、現在は包紙と資料は別々に保管されている。『改訂 内閣文庫国書分類目録 下』（六七七頁）に包紙と資料の分収状況が記されており、それによれば、第一四帙に収められていたことがわかる。

【五】長禄二戊寅年二月江戸図「請求番号 一七七・〇〇二七」

【書誌】

【外題】「長禄戊寅江戸図 全」（中央双辺題簽に直刷）

【内題】「長禄二戊寅年二月江戸図」

【裏書】「明治十六年ニ至リ四百廿六年」（裏表紙の付箋）

【形態】 畳物

【数量】 一鋪

【表紙】 黄檗色

【料紙】 楮紙

【サイズ】 三六・四×四八・七糎（折畳時一八・二×八・三糎）

【年代記載】 「宿谷喜太郎旧蔵 中村文蔵備 御覧 文政元年七月六日」

（内題右横）、「明治十四年三月三十日翻刻御画」（奥書）

【縮尺記載】 なし

【印記】 「外務省図書記」

【版元】 小石川区小石川表町三十六番地 東京府平民 翻刻人 橋爪貫

一

【収納容器】 なし

【旧蔵者】 外務省

【旧番号】 和書 一四五一一号

【備考】 刊本

【内題補記】

「宿谷喜太郎旧蔵 中村文蔵備 御覧 文政元年七月六日」（内題右横）、

「谷文晁模」（内題左横）

【付記】

江戸城ハ人皇百三代後花園院ノ御宇、京都將軍家ハ慈照院殿義政公ノ御時、関東ハ足利左馬頭成氏（割注）古河ノ御所ト云フノ管領扇ヶ谷ノ上杉修理太夫定正ノ老臣太田備中守持資入道ニテ道灌ト号ス、文武二道ノ名将ナリ、川越ニ在テ鎌倉ヘ通路ノ為メ、江戸ニ一城ヲ築カントラ思ヒ、最初駒込ノ台ニ繩張セシガ、心ニ不叶トテ、又溜池ノ辺ニテ勝地ヲ見立、繩張ノ後、里人ヲ召テ村名ヲ問ヘバ、千代田・宝田・祝言村トノ三ヶ所ナリト言フ、道灌大ニ喜ビ目出度也トテ、康正二年丙子春ヨリ

事始め、翌長禄元年丁丑四月八日土木功成ル、其頃八千代田ノ城トモイヒシト也

○以下後人ノ記載セシモノト思ハル

本住院ハ今本所ノ報恩寺ナリ、平河口ニアリシ故、平河山ト云フ

田安明神ハ築土ヘ移リテ津久土明神ト云フ、飯田町ノ産神ナリ

三藐院ハ東叡山ノ下ヘ移ル、今ハ養生院ト云フ

芝崎ノ道場ハ時宗遊行派ニテ、今ノ浅草日輪寺ナリ

会下寺トアルハ総泉寺ノ事ナリ、石浜ハ今の端芝ナリ

国分方「カウガイ」トヨミテ、今ノ筭橋辺ノ事ナリ

金曾木ハ小石川金杉ナリ

僧司谷ハ今の雑司谷ナリ

品川辺に小川の清水あり

むさしのの小川のしみつ絶やらむ岸の根芹をあらひこそすれ 道灌

【奥書】

明治十四年三月三十日翻刻御画

小石川区小石川表町三十六番地

東京府平民

翻刻人 橋爪貫一

【解題】

長禄年中江戸絵図の刊本。文政元年（二八一八）頃に谷文晁が模写し

たと伝えられるものを、明治一四年（二八八二）に翻刻、刊行した絵図。河川は青色、山は緑色、街道は赤色で描かれ、村名・地名・寺社名等が黒字で記されている。絵図中央にある太田氏の館は、「太田居城」と記され、赤い四角で囲まれている。絵図の下部には、太田道灌による江戸城築城について記され、さらに「以下後人ノ記載セシモノト思ハル」として、寺社の名称や地名に関する考証が記されている（付記）。長禄年中江戸絵図については、(三)「長禄年中江戸図」の解題を参照。

〔六〕江戸大切絵図「請求番号 一七七・〇四九二」

【書誌】

〔外題〕「江戸大切絵図 共十」（中央単辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一〇鋪

〔表紙〕朽葉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕

①一三三・二×一九一・三糎（折畳時三七・三×二六・六糎）

②一三二・七×一八八・五糎（折畳時三七・五×二六・六糎）

はみ出し部分五・五×二二・四糎

③一九三・三×一三七・〇糎（折畳時三七・四×二六・七糎）

④一〇六・二×一〇五・八糎（折畳時三七・四×二六・八糎）

- ⑤ 一五一・二×一〇五・五糎 (折畳時三七・五×二六・七糎)
- ⑥ 一七一・〇×一〇六・五糎 (折畳時三七・五×二六・八糎)
- ⑦ 一三四・二×一七〇・一糎 (折畳時三七・五×二六・七糎)
- ⑧ 一六七・二×一四〇・一糎 (折畳時三七・七×二六・六糎)
- ⑨ 一八五・三×一二五・二糎 (折畳時三七・八×二六・九糎)
- ⑩ 一六六・五×一〇六・五糎 (折畳時三七・一×二六・六糎)

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「日本政府図書」、「明治十二年購求」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六二五八号

〔備考〕手書彩色、裏打、虫損部修復跡あり

【図の地域分布】(筆者所見)

- ① 青山辺
- ② 浅草辺
- ③ 大名小路辺
- ④ 本所深川辺
- ⑤ 白金辺
- ⑥ 神田・浜町・日本橋辺
- ⑦ 京橋南・築地・鉄炮洲辺
- ⑧ 亀戸辺
- ⑨ 高輪・田町辺
- ⑩ 雑司ヶ谷・音羽辺

【解題】

江戸及び江戸周辺地域を描いた絵図。写本。切絵図のごとく、地域ごとくに一〇枚に分割されている。何らかの版本を模写した可能性もあるが、詳細は不明。①の絵図の裏にメモ用紙が添付され、内容年代と縮尺の記載のほか、一〇鋪の位置関係が図で示されている。後年のメモ書きであり、本資料を整理した際に付したものであろう。それによれば、「中村静夫氏の研究による」と記した上で、内容年代は寛政末年頃まで(西暦一七五〇～一八〇〇年前後)であり、縮尺について、江東地区二枚は約二一〇〇～二二〇〇分一、その他の八枚は、約二七〇〇～二八〇〇分一とある。印記「大日本帝国図書印」・「明治十二年購求」から、明治一二年(一八七九)に内務省が購入した資料であることがわかる。

〔七〕 武州豊嶋郡江戸庄図「請求番号 一七七・〇四九二」

【書誌】

- 〔外題〕「寛永九年江戸絵図」(中央単辺題簽に墨書)
- 〔内題〕「武州豊嶋郡江戸庄図」
- 〔裏書〕「寛永年間」(端裏)、「東江」(端裏)
- 〔形態〕疊物
- 〔数量〕一鋪
- 〔表紙〕朽葉色
- 〔料紙〕楮紙
- 〔サイズ〕九四・五×一二七・〇糎(折畳時三七・二×二七・〇糎)

〔年代記載〕「寛永九年申十二月 重開板」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「不忍文庫」、「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」、「日本政

府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六二五二号

〔備考〕模写本、手書彩色、裏打、虫損部修復跡あり

【解題】

武州豊嶋郡江戸庄図の写本。同図は刊行された江戸の地図としては最も古のもので、「寛永江戸図」ないし「寛永図」と略称される。個々の資料は多少の差異があるものの、概ね同じような絵図が、国立国会図書館、東京都立中央図書館をはじめとして、各機関に数多く残されている。当館でも本図のほか、複数点（本稿「一〇」、「一一」、「一二」）を所蔵している。本図のように、「寛永九年申十二月 重開板」と記された絵図も多数存在するが、波多野純（波多野 1986）や加藤貴（加藤 1998）の研究によれば、これは考証の成果として記された刊年であって、実際に刊行された年次を示すものではないという。また、近松鴻二（近松 1997）によれば、「寛永図」（武州豊嶋郡江戸庄図）は、武家屋敷の所有者の記載等から、「国立国会図書館本」系と「都立中央図書館本」系の大きく二系統に分かれるという。近松の分類に当てはめれば、当館所蔵の本図は、「都立中央図書館本」系になる。

本図には、左欄外に付記を記すために設けられたとみられる枠が印字されている（枠内は空欄）。左欄外に付記が記されるのは、文化八年（一

八一）、文化十二年、天保四年（一八三三）に板行された図であることから、本図はこれらいずれかの板行図を模写したものと考えられる。印記に「不忍文庫」とあることから、屋代弘賢の旧蔵書であることがわかる。不忍文庫の蔵書は、弘賢の没後、阿波藩主蜂須賀斉昌に譲渡され、阿波国文庫に加えられた。明治維新後は徳島県立光慶図書館に委託、保管されたようだが、一部は旧藩士に分け与えるなどして、維新时期に散出したようである。本資料は、「大日本帝国図書印」と「明治十二年購求」という印記があることから、明治十二年（一八七九）に内務省が購入したものであることが判明する。購入の詳しい経緯は不明であるが、維新时期に阿波国文庫から流出したものを、当時の所有者ないし古書店等から購入したと推測される。

〔八〕江戸絵図「請求番号 一七七・〇四九三」

【書誌】

〔外題〕「江戸絵図」（中央単辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕朽葉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕一〇五・〇×一一〇・七糎（折畳時三七・三×二六・六糎）

〔年代記載〕「天明七丁未正月吉日」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」、「日本政府図書」、「内

閣文庫

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六二五五号

〔備考〕手書彩色、裏打、貼紙

【書き入れ①】

私序

僧司谷 今雑字二作ル

瀧川村 今瀧ノ川ト云

下條村 十條村カ

平塚 今平塚明神ノアタリハ中里村ト云

新堀村 二井ホリ今日暮里（ニツホリ）

箕輪高屋 今ミノワト斗云

千速村 今千束ノ字千束郷トモ云

石濱村

橋場法（殿掛）□（源）カ）寺石碑ニ

大同二年祖テ

武州豊嶋郡砂尾庄石濱道場

トアリ

今不動院山号砂尾山ト云

會下村 未知 法源寺カ

総泉寺カ

須田村 今 隅田村

千束郷ノコト、浅草寺鐘ノ銘ニ

武州豊嶋郡千束郷ト有テ

至徳四年ノ年号有トナリ

無戸分 不知

阿佐谷 今云山谷サンヤノコトカトモ

未慥

【書き入れ②】

絵図

此絵図或人の秘しけるを乞得之うつし侍る、右本書三本校合せるよしにてイと有、又別にはり紙あり、年代さだかならず、一本に元龜天正の頃とありとや、古を好む人の名所旧蹟を尋るしとも成りなん歟、その持伝へし人ふかく秘し蔵せり、故にまた他見をゆるさずと云々

天明七丁未正月吉日

松本氏珍藏

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。河川は青色、山は緑色、街道は黄色で描かれ、村名・地名は黄色地の楕円の中に黒字で記されている。余白に「私序」〔書き入れ①〕と「絵図」〔書き入れ②〕と題する文章がある。「私序」には村名の考証、「絵図」には筆写・校合過程が記されている。印記「大日本帝国図書印」・「明治十二年購求」から、明治十二年（一八七九）に内務省が購入したことがわかる。長禄年中江戸絵図については、「二」長禄年中江戸図」の解題を参照。

〔九〕江戸絵図「請求番号 一七七・〇四九四」

【書誌】

〔外題〕「江戸絵図」（中央単辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕「雑司谷 小日向 小石川 高田 市谷 番町」、「中野 柏木
よゝ木 四谷 千駄ヶ谷 あさふ 渋谷」、「本郷 田安 半蔵 御
城廻り 石町 神田 京橋 靈岸しま 両国迄」

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕朽葉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕一五六・〇×二二八・八糎（折畳時三二・二×二八・〇糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」、「日本政府図書」、「内

閣文庫

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六二五六号

〔備考〕裏打、一部雲母引

【解題】

江戸城を中心に江戸を描いた図。一部欠。図の裏側に三ヶ所、朱筆で地名が記されている。作成年代不明。印記「大日本帝国図書印」・「明治十二年購求」から、明治十二年（一八七九）に内務省が購入した資料であることがわかる。

本図は明暦の大火以前の江戸を描いた図と考えられる。理由は、①吹上に尾張、紀伊、水戸の屋敷があること、②「徳松様」（徳川綱吉）、「長松様」（徳川綱重）、「天寿院様」（天樹院、千姫）の屋敷が竹橋門付近にみられること、③江戸城の天守が描かれていること、による。尾張、紀伊、水戸の屋敷は、当初、吹上に存在したが、明暦の大火後、防火のため城外に移された。綱重と綱吉は、慶安年間頃（一六四八〜一六五二）に竹橋に邸宅を与えられるが、明暦三年（一六五七）の大火により、竹橋の屋敷は類焼、綱重は桜田、綱吉は神田へ新邸を与えられた。天樹院（徳川秀忠の長女）は、寛永三年（一六二六）、姫路藩主本多忠政の嫡子で姫路城部屋住であった夫の本多忠刻の死去に伴って江戸へ移り、竹橋御殿に居住、寛文六年（一六六六）に死去した。従って、本図の内容年代は、綱重と綱吉に竹橋の邸宅を与えられた慶安年間から大火で類焼する明暦三年頃までの図であろう。

〔二〇〕武州豊嶋郡江戸庄図「請求番号 一七七・〇五三八」

【書誌】

〔外題〕「寛永江戸絵図」（中央単辺題簽に墨書）

〔内題〕「武州豊嶋郡江戸庄図」

〔裏書〕なし

〔形態〕 疊物

〔数量〕 一鋪

〔表紙〕 黄檗色

〔料紙〕 楮紙

〔サイズ〕 九三・一×一二四・五糎（折疊時二四・五×一七・五糎）

掛紙一六・〇×四五・六糎

〔年代記載〕 「寛永九年申十二月重開板」、「従寛永元甲子年至安永九庚子年一百五十九年也」（朱筆、掛紙）、「天保四年五月十五日七十六翁

源弘賢

〔縮尺記載〕 なし

〔印記〕 「大日本帝国図書印」、「地理寮印」、「日本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕 なし

〔旧蔵者〕 太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕 和書 三六一五六号

〔備考〕 模写本

【掛紙】

従寛永元甲子年至安永九庚子年一百五十九年也（朱筆）

此江戸絵図を承応二年年中之図と記し給ふハいかなる不僉議下候や、駿河大納言忠長郷（つや）の御屋形も見ゆ、忠長郷（つや）ハ寛永十一甲戌十一月十八日上州高崎の配所に生害し給ふ、承応の頃迄彼郷（つや）の御館あるへきにあらず、其上誓願寺の辺于松倉豊後守屋敷も記して有之、松倉ハ肥前島原を領せしに、分より切支丹増長して其家を断絶せられけるとぞ、其比島原へ諸為発向して切支丹三万七千人を殺せしハ、寛永十五年戊寅の春也、

是又承応元年までハ十五年以前の事なり、忠長卿の御屋形、松倉家之屋敷在之事を以、愚按すれば、いかにも寛永十一年より以前の図と思ふ、のミ

源貞雄

左二記考ハ天保年間屋代氏印刻之再々板二有之所なり、按するに、此図を作りしハ寛永七八年頃ならんか、図中に藤堂大学頭、加藤式部少輔、鳥居士佐守、本多美濃守等の屋敷あり、寛永七年、藤堂和泉守高虎、加藤左馬介嘉明卒し、息大学頭高次、式部少輔明成相続す、八年、鳥居士佐守成次、本多美濃守忠次卒す（嘉）、然れば寛永七八年の間に此図を印刻せる物なるへし、只うたかハしきハ、加藤左馬介の下屋敷存り、式部と書へきを書改さる誤にてもあらんか、弘賢思ふに此考は大久保西山翁なるへし

天保四年五月十五日七十六翁

源弘賢

【解題】

武州豊嶋郡江戸庄図の写本。近松鴻二の研究（近松1997）によれば、「国会図書館」系の写本。本資料の特徴的な点は、資料の下方貼り付けられた掛紙である。掛紙の冒頭には、「従寛永元甲子年至安永九庚子年一百五十九年也」と朱筆で記され、源貞雄（瀬名貞雄）と源弘賢（屋代弘賢）の考証が書き留められている。加藤貴（加藤1998）によれば、寛永江戸図（武州豊島郡江戸庄図）の模写図は、安永九年（一七八〇）に瀬名貞雄が模写したという記事が最も古い記事であるという。一方、本図の屋代弘賢の考証は、天保四年（一八三三）刊行の武州豊嶋郡江戸

庄図の余白に印刷された、弘賢の考証を書き写したものとみられる。なお、この掛紙は本図を模写した際に添付したもののか、後に貼り付けたものなのか、定かではない。ただし、図とは紙質も色合いも異なることから、後者ではないかと推測される。武州豊嶋郡江戸庄図については、「七」
「武州豊嶋郡江戸庄図」の解題を参照。

〔二一〕 武州豊嶋郡江戸庄図「請求番号 一七七・〇五四四」

【書誌】

〔外題〕「荏上古図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「武州豊嶋郡江戸庄図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕香色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕九三・八×二三四・七糎（折畳時二三・五×一七・二糎）

〔年代記載〕「文化辛未春」

〔縮尺記載〕なし

〔版元〕須原屋茂兵衛、近江屋與兵衛、越後屋長二郎

〔印記〕「日本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 四三三二七号

【備考】刊本、摸刻

【跋文】

此古図原本信州某家蔵

大城所在列侯朝士之邸及阡陌街巷具備而地位名号間有与、今異者蓋二百年前後坊刻也、往々蠹蝕予恐其至糜爛、因請模刊全、仍其旧好古君子或有取焉 文化辛未春 懶窩主人識

【解題】

武州豊嶋郡江戸庄図の刊本。文化八年（二八一）に刊行されたもの。近松鴻二の研究（近松 1997）によれば、「国立国会図書館」系の写本。文化八年の刊行時には左端の余白に跋文が印刷された【跋文】。武州豊嶋郡江戸庄図については、「七」武州豊嶋郡江戸庄図」の解題を参照。

〔二一〕 慶長江戸図「請求番号 一七七・〇五五二」

【書誌】

〔外題〕「慶長江戸図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕朽葉色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕九六・三×八〇・四糎（折畳時二七・三×一八・八糎）

〔年代記載〕

「文政十年丁亥閏六月写、同月廿三日対校畢」

「天保庚子十月十六日 信濃国松本鈴木諧識」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「日本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 一五二五七号

〔備考〕手書彩色

【書き入れ①】

図中朱書同（朱筆）

神尾氏追加（朱筆）

天正十八庚寅年大神宮關東御入国、慶長十一丙午年江戸御城立、天

正十八庚寅ヨリ慶長十一丙午年迄十七年ニナル、此図者江戸御城建、

諸大名並御旗本江屋敷地被下候節之図面焉

【書き入れ②】

文政十年丁亥閏六月写、同月廿三日対校畢（朱筆）

本図神尾藤三郎政輔所蔵（朱筆）

【書き入れ③】

右慶長年中江戸図者我国人某所伝来而、友人神尾政輔模写者与世間見行
殘闕者不同好古之士、豈可不宝重以備考扞哉、或評見行図書此図不載大

城西南地方蓋殘闕不全者也、恐当時東北一幅西南一幅合二幅始為全圍而
今逸其一、爾猶信有梅龍園主人者嘗著江戸図考、以為其說非是靡々争弁
不遺余力累數百千言其弁可觀雖、則可觀其実則否卒不可從也、如使主人
觀此図幡然其角將改刪其稿也、必矣其墓木既拱無由寄示是可憾已、世有
翻刻寛永年中江戸図、其原本亦係我国人所蔵古図二幅散逸、多年有時而
出、並自我国人手傳播世間可謂奇哉
天保庚子十月十六日 信濃国松本鈴木諧識

【解題】

慶長江戸絵図の写本。慶長江戸絵図は、江戸城の内郭部分の屋敷割の
図。屋敷の拝領者名、間口、奥行等が記されている。「慶長江戸絵図」、

「慶長江戸図」等の名称が存在するが、本稿では「慶長江戸絵図」に統
一する。慶長江戸絵図は、記載された人物名などから、慶長一三年（一
六〇八）頃の江戸の様子を描いた絵図と考えられている。しかし、屋敷
名が表門の方を向いているという、「新板江戸大絵図」（寛文一〇年（一
六七〇）刊。「新板江戸外絵図」と合わせ、「寛文五枚図」と呼ばれる。）
以降にみられる技法を用いていること、実測図は明暦の大火以後にみら
れる図だが、慶長江戸絵図には実測図とみられる正確さがあることなど
から、後世に作成された図である可能性が高いことが指摘されている。
ただし、近年、齋藤慎一（齋藤2019）は、各機関に所蔵されている「慶
長江戸図」を比較、五つグループに分類し、グループの相違は江戸城の
構造の年代の変遷として把握できると指摘し、「慶長江戸図」は江戸城の
構造を考える上で重要な絵図群であると評価した。

当館所蔵の本図には、余日に書き込みがあり、文政一〇年（一八二七）
と天保一一年（一八四〇）の年代記載がある【書き入れ②】、【書き入れ

③)。また、図には朱筆または青字で校正が書き込まれている。

〔二三〕 武州豊嶋郡江戸庄図「請求番号 一七七・〇五五三」

【書誌】

〔外題〕「寛永往古江戸絵図」（左肩双辺題簽に墨書）

〔内題〕「武州豊嶋郡江戸庄図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕九〇・二×一三四・一糎（折畳時二七・二×一九・四糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「京都府図書印」、「正院地志課図籍之記」、「内務省文庫印」、「日

本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六一一一号

〔備考〕刊本、摸刻

【解題】

武州豊嶋郡江戸庄図の刊本。刊年不明。近松鴻二の研究（近松1997）

によれば、「国立国会図書館」系の写本。印記から、当初、京都府所蔵であったものが、正院地志課に入り、さらに内務省へ移管され、内閣文庫に伝わたとみられる。武州豊嶋郡江戸庄図については、〔七〕「武州豊嶋郡江戸庄図」の解題を参照。

〔二四〕 慶長十一年江戸絵図「請求番号 一七七・〇五五四」

【書誌】

〔外題〕「慶長江戸絵図」（中央単辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕「慶長十一年江戸絵図」（題簽）

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕黄檗色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕九五・七×八七・〇糎（折畳時二五・五×二一・六糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「地理寮印」、「大日本帝国図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六一五七号

〔備考〕手書彩色

【解題】

慶長江戸絵図の写本。写年不明。本図には余白の書き入れや校正の記載等はない。道は黄色、堀は水色、土手は緑色で描かれている。慶長江戸絵図については、「二二」『慶長江戸図』の解題を参照。

〔二五〕長禄年中江戸起立之図〔請求番号 一七七・〇五五五〕

【書誌】

〔外題〕「長禄年中江戸起立之図」（中央単辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕黄檗色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕七七・〇×八〇・八糎（折畳時二六・〇×二〇・五糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六一五八号

〔備考〕手書彩色

【書き入れ①】

貞雄云国府方ト書テ、カウガイト、トヨメリ此カウガイ村南回茶話二見エタリコレスナハチ今ノ筭橋辺ノ事也（読点は資料による）

【書き入れ②】

長禄年中江戸起立之図

一本

元龜元正武州江戸辺鄙之図

田口史（朱筆）

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。写年不明。河川は青色、山は緑色、街道は赤色で描かれ、村名・地名は黄色地の楕円の中に黒字で記されている。朱筆で考証等が記されるほか、瀬名貞雄（二七一六〜一七九六）による考証も書き込まれている（【書き入れ①】）。絵図の左下の余白に、絵図の表題と人物名（絵図の作成者ないし所蔵者か）が記載されている（【書き入れ②】）。長禄年中江戸絵図については、「三二」『長禄年中江戸図』の解題を参照。

〔二六〕長禄年間江戸起立之図〔請求番号 一七七・〇五五六〕

【書誌】

〔外題〕なし

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕一枚物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕なし

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四七・八×六四・六糎（折畳時二四・四×一六・七糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「内務省文庫印」、「日本政府図書」

〔収納容器〕袋（二重構造） 間似合紙（外側） 楮紙（内側）

二七・八×一九・六糎

〔長禄年間江戸起立之図 版本〕（中央直書墨書、「東海之部」（付箋）

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 四四二八二号

〔備考〕刊本

【書き入れ】

長禄年間江戸起立之図也乎

凡七拾八箇村

【解題】

長禄年中江戸絵図の刊本。刊年不明。河川のみ青色で描かれ、それ以外の山や街道、村名・地名・寺社名等に彩色はない。村名・地名は楕円の枠に囲まれ、寺社名は四角い枠に囲まれている。考証等の書き込みはない。長禄年中江戸絵図については、(二二)「長禄年中江戸図」の解題を

参照。

(二七) 長禄二年己未二月江戸絵図〔請求番号 一七七・〇五八九〕

【書誌】

〔外題〕なし

〔内題〕「長禄二年己未二月」（ママ）

〔裏書〕なし

〔形態〕一枚物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕なし

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四三・二×三〇・一糎（折畳時一五・三×六・二糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」、「日本政府図書」

〔収納容器〕袋 楮紙 香色 一五・五×六・八糎

〔長禄年中江戸絵図 再刻版〕（中央直書墨書）

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六二二一号

〔備考〕刊本

【解題】

長禄年中江戸絵図の刊本。刊年不明。長禄年中江戸絵図については、

〔三〕「長禄年中江戸図」の解題を参照。なお、長禄二年（二四五八）は戊寅であり、己未は永禄二年（二五五九）を指すと考えられる。長禄年中江戸絵図には、図は同一のものを使用して年号だけ変えた、永禄図、文明図、長享図、元龜元正図等が存在することから、転写の過程で年号等に混同が生じたのであろう。印記「大日本帝国図書印」・「明治十二年購求」から、明治十二年（一八七九）に内務省が購入した資料であることがわかる。

〔二八〕長禄年中江戸図「請求番号 一七七・〇五九四」

【書誌】

〔外題〕「長禄年間江都絵図」（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕「長禄年中江戸図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕香色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕二七・八×四〇・四 糎（折畳時一三・八×一〇・二 糎）

〔年代記載〕「自長禄元年 至於 文化三戊寅凡三百六十一年」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」、「日本政府図書」、「石

伍文庫

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 三六二二〇号

〔備考〕手書彩色

【書き入れ】

後花園帝人王長禄元年、將軍義政公執政十三年、改元至今三百有余歳、于時戊寅仲春廿一日、写于昌平学舎有斐堂

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。文化三年（一八〇六）に作成されたもの。印記「石伍文庫」の所用者は不明。「大日本帝国図書印」・「明治十二年購求」の印記があることから、元は個人蔵であったものを、明治十二年（一八七九）に内務省が購入したと推測される。河川は青色、山は緑色、街道は赤色で描かれ、村名・地名・寺社名等が黒字で記されている。長禄年中江戸絵図については、〔三〕「長禄年中江戸図」の解題を参照。

〔二九〕長禄二年□□二月江戸絵図「請求番号 一七七・〇六〇二」

【書誌】

〔外題〕「長禄年間武蔵国絵図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「長禄二年□□二月」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕黄檗色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕二七・二×三八・二糎（折畳時一九・三×一三・九糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「地理寮印」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六一五四号

〔備考〕模写本、手書彩色

【書き入れ】

〔東立ノ古図〕（右上）

〔忠賢写〕（右下）

〔小花和一楽〕（左下）

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。「忠賢」という人物が写したようだが、作成時期も含め、詳細は不明。河川は青色、山は緑色、街道は黄色、寺社等の建物の屋根は赤色で描かれ、村名・地名・寺社名等が黒字で記されている。長禄年中江戸絵図については、(三二)「長禄年中江戸図」の解題を参照。

(二一〇) 武州古改江戸之図「請求番号 一七七・〇六〇九」

【書誌】

〔外題〕「承応江戸絵図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕「武州古改江戸之図」

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕黄檗色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕六三・五×九四・八糎（折畳時二二・八×一二・五糎）

〔年代記載〕「承応二癸年中夏日」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「地理寮印」、「田口明良蔵」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六一五五号

〔備考〕模写本、手書彩色

【書き入れ】

右此図古板世に多しといへとも其あやまりあり、屋敷替或ハ新屋敷など依有之、承応元年より同式年まで其所々ヲ考、令新板者也
承応二癸年中夏日

【解題】

承応二年（二六五三）に刊行された図の写本。俗に「承応江戸図」と

称される。明暦大火以前の江戸の様子を知ることができる。武州豊島郡江戸庄図をはじめとした、寛永図群の一形式。東京都立図書館他、各機関に類似の絵図が存在する。武州豊島郡江戸庄図と比較すると、江戸の市街地が広がっていることがわかるが、浅草、下谷、四谷、青山、本所、深川等までは描かれていない。当館の所蔵の本図は、精細な彩色が施されている。なお、印記「田口明良蔵」は、江戸時代の書肆で、『典籍秦鏡』の著者である田口明良の蔵書印。

〔二二〕久右衛門町代地絵図〔請求番号 一七七・〇六三七〕

【書誌】

〔外題〕「久右衛門町式丁目代地・同町壱丁目代地絵図」（中央無辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕「橋本之誓願寺前にて受取候元屋敷主之覚、久右衛門代地ニ請取候元地屋敷方之絵図」

〔形態〕畳物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕香色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四八・五×七一・二糎（折畳時一四・三×一二・二糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「日本政府図書」、「斎藤文庫」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 九四〇〇号

〔備考〕手書彩色、裏打

【解題】

江戸の神田久右衛門町一丁目代地（現在の千代田区東神田一丁目）、同二丁目代地（現在の千代田区岩本町二丁目）周辺を描いた絵図。久右衛門町代地及び神田富松町代地（現在の千代田区東神田一〇二丁目、中央区日本橋馬喰町二丁目）には、元地の所有者の情報が朱筆で記されている。方角の記載があるものの、実際の方角と比較すると、微妙にズレがみられる。『安永三年小間附北方町鑑』によれば、久右衛門町一丁目代地及び二丁目代地と富松町代地は、享保三年（一七一八）の火災で元地が類焼したため、代地が成立したようである。従って、享保年間以降の絵図とみられるが、正確な年代は不明。なお、印記「斎藤文庫」は、明治時代の商人、俳人である斎藤雀志の蔵書印。

〔二二〕長祿江戸図〔請求番号 一七七・〇六五六〕

【書誌】

〔外題〕「長祿江戸図」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

【数量】一鋪

【表紙】朽葉色

【料紙】楮紙

【サイズ】七九・五×七五・二種（折畳時二六・七×一八・四種）

【年代記載】「安永七戌年」、「安政四年丁巳九月写之 蜷川」、「明治八年

三月廿二日 吉村春峰」、「明治九年七月三日以吉村春峰所蔵本写之」

【縮尺記載】なし

【印記】「日本政府図書」

【収納容器】なし

【旧蔵者】不明

【旧番号】和書 二八七九六号

【備考】手書彩色、雲母引

【書き入れ①】

江戸砂子に市ヶ谷八幡をはしめ、小日向金剛寺坂恵日山金剛寺、牛込の
草薙薬師三の外、太田道灌勸請建立の場所数多ありといへとも、皆当城
を治め給ひしより後の事と知る

【書き入れ②】

本住院ハ今本所ノ平河山法恩寺也ト云、法華宗本国寺ノ末ナリ、江戸砂
子法恩寺条ニ当寺ハ太田道灌ノ建立ニテ御城中平河ニアリ、後柳原ニ移
リ、谷中江移ル、元禄年中本所ニ移ルトアリ、東叡山ノ下エ移ル、今ノ
養玉院是ナリ、宝永年中号替ルヨシ、南向茶談ニ見ユ

【書き入れ③】

長禄年中江戸・書ノ分ハ大久保何某所持ノ絵図、瀬 貞雄本ノ写ヲ以校
合、按ニ長禄年中朝廷ハ^{人書三代}後花園院、京都公方ハ足利第八代慈照院義
政公称東山殿、関東ハ足利左馬頭成氏称古河御所、山内上杉兵部太輔房
頭、扇谷上杉修理太夫定正也、定正ノ老臣太田備中守持資一作資永入道
道灌築江戸城、康正二年丙子ヨリ初リ明ル長禄元年^{丁巳}四月八日功成、自長
禄元年^{丁巳}至^{丁未}安永七戌年三百二十二年也

【書き入れ④】

太田時利秘書
番万右工門 落板

【書き入れ⑤】

安政四年丁巳九月写之 蜷川（印）（宮道式胤）

【書き入れ⑥】

明治八年三月廿二日 吉村春峰

【書き入れ⑦】

明治九年七月三日以吉村春峰所蔵
本写之

内務少丞従六位岡谷繁実督

写図掛十四等出仕 鈴木仙太郎（印）

写 川尻金生（印）

校 松村与四右衛門（印）

同 内藤 誠（印）

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。長禄年中江戸絵図については、「三」長禄年中江戸図」の解題を参照。本資料は、弘化四年（二八四七）に米田万右衛門が出版した刊本を模写したものとみられる。米田万右衛門の刊本は、国立国会図書館に所蔵されている（以下、米田万右衛門刊本）。もとの刊本に彩色は施されていないが、本資料には彩色が施されており、河川は水色、山は緑色、街道は黒色の点線で描かれる。村名・地名等が黒字で記され、楕円形の枠に囲まれている。

余白の書き入れについて、【書き入れ①～③】は、米田万右衛門刊本と概ね同様の内容が記されているが、転写過程における誤記等が若干みられる。【書き入れ④～⑦】は転写時に追記した情報と考えられる。米田万右衛門刊本には絵図の左下隅に奥書が掲載されているが、本資料ではそれが省略されて、「太田時利秘書」「番方右工門 落板」とのみ書き込まれている（【書き入れ④】）。「番方右工門」は転写を繰り返す過程で生じた誤記であろう。

【書き入れ③～⑦】の内容から、この図の伝来過程を知ることができると。それによれば、本図のものは、大久保何某所持の絵図を、瀬（名）貞雄本の写をもって校合したもので、安永七年（一七七八）に作成された（【書き入れ③】）。その後（弘化四年に）米田万右衛門が刊行し（【書き入れ④】）、その刊本を安政四年（一八五七）に蜷川式胤が写し（【書き入れ⑤】）、さらに明治八年（一八七五）に吉村春峰が写した（【書き入れ⑥】）。そして、明治九年、吉村春峰の所蔵本を岡谷繫実らが写した（【書き入れ⑦】）。この明治九年に作成された写本が本図である。

『改訂 内閣文庫国書分類目録』や当館DAには旧蔵者の記載はない。

しかし、内務省の役人であった岡谷繫実の監督のもとに資料を書写していること（【書き入れ⑦】）、本資料の表紙に「内務省図書」のラベルシールが添付されていることから、内務省旧蔵の可能性が考えられるが、定かではない。

「三」正保年中江戸絵図「請求番号 一七七・〇六六五」

【書誌】

〔外題〕「正保江戸図 写本」（左肩直書墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕なし

〔形態〕一枚物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕なし

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕二六〇・〇×二〇一・〇糎（折畳時三三・五×二〇・五糎）

〔年代記載〕「嘉永六年癸丑春 蜷川能登寺様方御借写」（裏面、貼紙）

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」、「日本政府図書」、「内閣文庫」

〔収納容器〕四方帙

〔正保年中江戸絵図〕（中央双辺題簽に墨書）

〔旧蔵者〕（内務省）

〔旧番号〕和書 三六二二四号

〔備考〕手書彩色、DAにて資料画像公開

【色凡例】

- (水色) 如此色水也
- (黄色) 如此色道也
- (灰色) 如此色田也
- (赤色) 如此色橋也
- (緑色) 如此丘及林

【書き入れ】

此江戸大絵図年月未詳、予考ルニ長松君御屋敷、越前宰相屋敷相見候、長松君正保元年七月廿四日御誕生、越前宰相忠昌朝臣正保二年八月朔日逝去ナレハ、正保元年申ヨリ二年七月頃迄之絵図ニヤ

【解題】

一般に「正保年間江戸絵図」とされる図で、正保元年（一六四四）頃の様子を描いたとされる絵図。当館のほか、国立国会図書館、東京都公文書館にも類似の絵図が所蔵されている。『古板江戸図集成』の解説によれば、いずれも同一図を転写したもので、原図はおそらく西山大久保忠寄蔵本であろうとされている。なお、当館の図は、「嘉永六年癸丑春 蛭川能登守様方御借写」との貼紙があり、嘉永六年（一八五三）に蛭川能登守（親常）（天保一五年（一八四四）から嘉永六年まで留守居、同年九月一四日、老衰につき辞職。）から借用して写したものであるという。本図は明暦三年（一六五七）の大火以前の江戸の様子を描いており、貴重な絵図である。絵図の余白の書き入れには、「長松君」（徳川綱重、正保

元年生）と「越前宰相」（福井城主松平忠貞、正保二年没）の屋敷が存在することから、正保元年中頃から同二年七月頃の絵図ではないかと記されている（書き入れ）。ただし、正保元年〜二年頃の情報がある一方で、正保以前の情報が表記されている場合もあり、古い情報が更新されないままの状態になっている箇所も部分的に見受けられる。

印記「大日本帝国図書印」・「明治十二年購求」から、明治十二年（一八七九）に内務省が購入した資料であることがわかる。『改訂 内閣文庫国書分類目録』や当館DAには旧蔵者の記載はないが、印記から内務省旧蔵であることが推測される。

〔二四〕江戸傍近図「請求番号 一七七・〇六九〇」

【書誌】

- 〔外題〕「江都傍近図 一鋪」（中央無辺題簽に墨書）
- 〔内題〕「江戸傍近図」
- 〔裏書〕なし
- 〔形態〕畳物
- 〔数量〕一鋪
- 〔表紙〕黄壁色
- 〔料紙〕楮紙
- 〔サイズ〕一八二・八×一三三・二浬（折畳時三〇・五×一七・〇浬）
- 〔年代記載〕なし
- 〔縮尺記載〕「三寸六分ヲ一里トス」
- 〔印記〕「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕不明

〔旧番号〕和書 三六七八五号

〔備考〕手書彩色、虫損部修復跡あり

【色凡例】

(茶色) 此色郡之界

(赤色) 此色道

(青色) 此色海川池

(黄色) 此色御料

(茶色) 此色寺社領私領

(黄色、茶色) 此色御料私料入合

(緑色) 此色山岡台芝地

(灰色) 此色武蔵野新田古田之界

(藍色) 此色草木

【解題】

江戸周辺の豊島、多摩、荏原、葛飾、足立の五郡について、村名、村高、街道、河川、寺社名所、村の風土等を記した絵図。地理学者であった古川古松軒は、寛政六年（一七九四）に松平定信より江戸近郊の地理調査を命じられ、その成果として『四神地名録』を提出した。その際、同書とともに幕府へ納められたのが、「江戸傍近図」である。本図は、その時提出された図なのか、後の写本であるのか定かではない。また、東京公文書館にも「江戸傍近図」を所蔵しているが、当館の図との関係性は不明である。

〔二五〕江戸御場絵図〔請求番号 一七七・〇八八四〕

【書誌】

〔外題〕①「目黒筋御場絵図 上」（中央双辺題簽に墨書）

②「目黒筋御場絵図 中」（中央双辺題簽に墨書）

③「目黒筋御場絵図 下」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕①「目黒筋御場絵図」

②なし（葛西筋御場絵図）

③なし（江戸近郊御場絵図）

〔裏書〕なし

〔形態〕畳物

〔数量〕三鋪

〔表紙〕代赭色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕①一八七×二五五糎（折畳時三三・二×三三・三糎）

②二七三×一二六糎（折畳時三三・二×二三・五糎）

③一一七×一二六糎（折畳時三二・八×二〇・二糎）

〔年代記載〕①「文化二年乙丑十二月」

②「文化二丑年春三月中旬凶之」

③なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕①「秘閣図書之章」、「日本政府図書」

②「秘閣図書之章」、「編修地志備用典籍」

③ 「秘閣図書之章」

〔収納容器〕 無双帙 砥粉色 三三一・五×二四・五×四・五糎
「江戸御場絵図」（左肩無辺題簽に墨書）

〔旧蔵者〕 編修地志備用典籍（昌平坂学問所）

〔旧番号〕 和書 三三四二〇号

〔備考〕 手書彩色、裏打（①〜③とも）、DAにて資料画像公開

【凡例】① 「目黒筋御場絵図」

（水色・楕円形） 此色品川領

（白色・楕円形） 此色世田谷領

（朱色・楕円形） 此色馬込領

（焦茶色・楕円形） 此色麻布領

（赤色・二重四角形） 御膳所

（赤色・四角形） 寺院

（黄色） 往還径

（青色） 海川堀池

（黄緑色） 山野芝原

（紺色） 郡境

（赤色） 領境

（緑色） 堤土手

（鳥居の絵） 社地

（松の絵） 森林

（灰色） 河原

【凡例】② （葛西筋御場絵図）

合印色分

（赤色・四角形） 御膳所

（黄色） 往還小街

（青色） 海川池堀

（緑色） 堤

（朱色・丸形） 武州葛飾郡 西葛西領

（朱色・六角形） 同 同領新田

（朱色・達磨形） 同 東葛西領上ノ割

（朱色・楕円形） 同 同領下ノ割

（朱色・長方形） 武州足立郡 洲江領新川東

（朱色・ハート形） 同 埼玉郡 八条領

（朱色・三角形） 下総国葛飾郡 行徳領

（朱色・将棋駒形） 同 小金領

【解題】

江戸近郊に設定された幕府の御鷹場の地図。図に書き込まれた年代記載から、文化二年（一八〇五）に作成されたことがわかる。①は「目黒筋」と呼ばれた馬込・世田谷・麻布・品川一帯、②は「葛西筋」とよばれた武蔵国葛飾郡・埼玉郡・下総国葛飾郡にまたがる一帯が描かれている。③は將軍家の鷹場として江戸近郊に設定された六か所（葛西筋・戸田筋・中野筋・目黒筋・岩淵筋・六郷筋）の範囲が支配別に示される。また、図の真ん中には十二方位で江戸城から各方面への距離が記され、余白には各筋の支配別の村数と石高が記されている。①〜③いずれも、村名や町名等は支配別に色や形を区別して描いている。なお、「編修地志備用典籍」の印は、文化七年以降、幕府が地誌の編集資料として昌平坂

学問所に集めた書籍に捺したものである。

されている。また、「大船通路」が赤色の点線で示されている。

〔二六〕江戸内海深淺測量図〔請求番号 一七八・〇〇三三〕

〔二七〕江戸内海深淺測量図〔請求番号 一七八・〇〇六七〕

【書誌】

〔外題〕「江戸内海測量之図」（左肩直書墨書）

〔内題〕「内海深淺測量之図」

〔裏書〕なし

〔形態〕疊物

〔数量〕一鋪

〔表紙〕香色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕四二・五×六〇・五糎（折畳時二二・五×一〇・三糎）

〔年代記載〕「嘉永六丑年秋八月写成」

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「日本政府図書」、「地誌備用図籍之記」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六七八四号

〔備考〕手書彩色

【解題】

江戸内海（江戸湾）の測量図。嘉永六年（一八五三）に写したものである。

一定の距離ごとに満潮時と干潮時の水深が記録され、棒杭間の距離も記

【書誌】

〔外題〕「江戸内海深淺測量図 共二」（中央双辺題簽に墨書）

〔内題〕なし

〔裏書〕「江戸内海深淺測量図」

〔形態〕疊物

〔数量〕二鋪

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕

① 一一四・六×一五七・九糎（折畳時二六・〇×一八・三糎）

② 一一六・五×一五五・六糎（折畳時二五・九×一八・三糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕「以曲尺一分為一町」

〔印記〕「日本政府図書」、「地誌備用図籍之記」

〔旧蔵者〕太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局

〔旧番号〕和書 三六七八三号

〔備考〕手書彩色

【凡例】

（赤色・太線）国界

(赤色・二重線) 郡界

(赤色・一重線) 直径里数

(赤色・点線) 船路

以曲尺一分為一町

【解題】

江戸内海(江戸湾)の測量図。二鋪で一つの絵図。絵図に記された方位盤を目安に、二枚の図を合わせると、一枚の絵図になる。水深、対岸までの距離、航路、台場の位置、沿岸の村の名称等が記されている。

【二八】江戸湾御固絵図 [請求番号 一八九・〇四〇八]

【書誌】

【外題】「東海之部」(右肩無辺題簽に墨書)、「江戸湾御固絵図」(中央無辺題簽に墨書)

【内題】なし

【裏書】なし

【形態】疊物

【数量】一鋪

【表紙】縹色

【料紙】楮紙

【サイズ】五九・一×六七・五糎(折畳時一四・五×八・五糎)

【年代記載】「嘉永六癸丑年八月三日午下刻異国船渡来……」(序文)

【縮尺記載】なし

【印記】「日本政府図書」、「地誌備用図籍之記」

【収納容器】なし

【旧蔵者】太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局

【旧番号】和書 三六七七八号

【備考】手書彩色、DAにて資料画像公開

【凡例】

御台場

地ノ名

御固場

【書き入れ】

嘉永六癸丑年六月三日午下刻異国船渡来、浦賀沖鶴崎観音崎御台場向フニ、船留、通辞兼応接ノ者異船工乗込、北アメリカ合衆国ノ由、国王方ノ書翰持参ノ由ニ付、長崎表工可相廻旨、国法ノ由申聞候処、国王ヨリノ書翰、浦賀工持参、奉行工直ニ相渡可申旨ニ付、相違致候而ハ、使接ノ者君命ヲ恥カシムル道理ニ相成申故、決而長崎表工難相廻旨殿鋪断有之、右ノ趣江戸表江伺ノ上、同九日、於久里浜、石見守請取之

●書翰渡相済、舩船後、本船一同浦郷沖迄乗入ルハツテイラ、神奈川辺乗廻候ニ付、何故留津ノ用処ヲ乗越候ヤ、浦賀ヨリ内ヘハ不乗入国法ノ段申聞候処、日本国ハ冬時分ハ波荒ク浦賀湊杯ハ船掛リ至而悪キ趣キ聞及ビシ故、重テ来節ハ大船数艘召連来候付、其節ノ船掛リ場所見分ニ参リ候ナリ、日本ノ国禁ニハ可有之ナレ共、海上ハアメリカ迄モ続シ事故、強テ日本ノ国禁ヲ守ル訳ニモ無之、又風波ノ荒キ処工船掛リ致居、難船

致シテモ御構無之ハ、不仁ノ御取扱ニモ相当リ可申、最早海上ノ浅深モ相量見候事故、出帆致旨申聞シ由

●フレカット 二艘

長サ二十六七間有之

蒸気船 二艘

一名飛燕船

ハツテイラ 八艘 内十間位三艘

五六間位五艘

●同十二日巳上刻出帆、平根山、洲ノ崎、伊豆ノ大島ノ間ヲ走り去ル、未ノ刻頃帆影モ不見由

【解題】

江戸湾の警備状況を描いた絵図。【書き入れ】には、嘉永六年（一八五三年）六月にペリーが浦賀へ来航した後、出帆するまでの出来事が記されている。また、絵図にはペリー率いる艦隊の黒船四隻が描かれている。これらのことから、本絵図は、嘉永六年のペリー来航時の江戸湾の警備状況を描いた絵図と考えられる。

〔二九〕 品川海中江御台場新規御取立并絵図（『嘉永雜記』所収）

〔請求番号 一五〇・〇一七〇（八）〕

【書誌】

〔外題〕「嘉永雜記 八」（左肩双辺題簽に墨書）

〔内題〕「十二 品川海中江御台場新規御取立」、「十三 伊勢守殿御渡」

〔裏書〕なし

〔形態〕 縦帳（絵図は一枚物で、帳面内に綴込）

〔数量〕 一冊

〔表紙〕 金茶色（格子柄）

〔料紙〕 楮紙

〔サイズ〕 絵図二七・〇×三八・〇糎（縦帳一六・七×二三・七糎）

〔年代記載〕 なし

〔縮尺記載〕 なし

〔印記〕 「修史局図書印」、「日本政府図書」

〔収納容器〕 なし

〔旧蔵者〕 太政官正院歴史課・修史局・修史館・内閣臨時修史局

〔旧番号〕 和書 三二七二八号

〔備考〕 手書彩色、DAにて資料画像公開

【解題】

嘉永七年（一八五四）、江戸湾の警備のため、海防策の一環として、品川沖に築造が計画された一の台場の図。当初の築造計画は二列一基であったが、実際に竣工したのは第一・二・三・五・六番台場のみ。第四・七台場は工事に着手したものの、途中で中止され、第八台場以降は着工にさえ至らなかった。なお、当館所蔵の本図と類似の絵図が、東京都立大学図書館所蔵の水野家文書の中に、「品川台場絵図」として存在している。『嘉永雜記』は藤川整斎が著した雑記。主に嘉永年間（一八四八～一八五三）

の諸記録を収録している。

〔三〇〕長禄江戸図考并図〔墨海山筆〕所収

〔請求番号 二二七・〇〇三二（六）〕

【書誌】

〔外題〕「墨海山筆 六」（左肩双辺題簽に墨書）

〔内題〕「長禄二年江戸絵図」

〔裏書〕なし

〔形態〕縦帳（絵図は帳面に綴込）

〔数量〕一冊

〔表紙〕香色（柄有）

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕縦帳二五・七×一八・三糎

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「大日本帝国図書印」、「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕内務省

〔旧番号〕和書 二八六一三号

〔備考〕手書彩色

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。本図は、絵図面を山側に中央で半分に折られ、

『墨海山筆』に綴じ込まれている。同書は、天保・嘉永の頃に、旭岱子（きよくたいし）によつて書写・編集された資料。中世以降成立の和歌・紀行・考証・小説等が幅広く収められている。本図「長禄二年江戸絵図」は、河川は青色、山は黒色、街道は朱色で描かれている。寺院の建物を示した図は朱色で着色されている。村名・地名等が黒字で記され、楕円形の枠に囲まれている。本図の次の頁には、「江戸図考」として、源吉子祥（不祥）と源繩土異（赤井東海 一七八七〜一八六二）による長禄年中江戸絵図の考証が書き写されている。「江戸図考」の末尾には、「天保四己季七月 旭岱子」と記され、天保四年（一八三三）に書写されたことがわかる。長禄年中江戸絵図については、〔三〕「長禄年中江戸図」の解題を参照。

〔三一〕長禄年中江戸絵図〔視聴草〕所収

〔請求番号 二二七・〇〇三四（一四五）〕

【書誌】

〔外題〕「続燿輝々燭地五集 六」（左端直書墨書）

〔内題〕「長禄年中江戸絵図」

〔裏書〕なし

〔形態〕縦帳（絵図は一枚物で、帳面内に綴込）

〔数量〕一冊

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕三〇・二×三九・五糎（縦帳二四・四×一六・八糎）

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「教部省文庫印」、「図書局文庫」、「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕教部省

〔旧番号〕和書 一二四九四号

〔備考〕手書彩色

【解題】

長禄年中江戸絵図の写本。河川は青色、山は緑色、街道と建物は朱色で描かれ、村名・地名等は黒色で記されている。本絵図は一枚物で、「視聽草」に綴じ込まれている。「視聽草」は幕臣の官崎成身が三〇年以上にわたってまとめた雑記。絵図と共に「長禄年中江戸絵図」と題する文書も綴じ込まれている。それには、中世から近世に至る江戸周辺地域の歴史と情勢について、『東鑑』や『源平盛衰記』等の資料を引用しながら、簡潔にまとめられている。長禄年中江戸絵図については、(三二)「長禄年中江戸図」の解題を参照。

(三二) 永禄年中相州小田原北条氏康時代武州江戸絵図 『視聽草』所収
〔請求番号 二二七・〇〇三四(一四五)〕

【書誌】

〔外題〕「続焔燿々焔燧五集 六」(左肩直書墨書)
〔内題〕「永禄年中相州小田原北条氏康時代武州江戸絵図」
〔裏書〕なし

〔形態〕縦帳(絵図は一枚物で、帳面内に綴込)

〔数量〕一冊

〔表紙〕金茶色

〔料紙〕楮紙

〔サイズ〕二六・四×四〇・三種(縦帳二四・四×一六・八種)

〔年代記載〕なし

〔縮尺記載〕なし

〔印記〕「教部省文庫印」、「図書局文庫」、「日本政府図書」

〔収納容器〕なし

〔旧蔵者〕教部省

〔旧番号〕和書 一二四九四号

〔備考〕手書彩色

【解題】

本図は一枚物で、前掲の(三二)「長禄年中江戸絵図」と共に、『視聽草』に綴じられている。絵図の内題によれば、永禄年中の北条氏康の時代の江戸の絵図であるという。絵図それ自体は、長禄年中江戸絵図とよく似た絵図。河川は青色、村名・地名等は黒字で、長方形の枠に囲まれている。「墨引ハ古ノ奥州海道ナリ」と記され、黒色の線は街道を示しているようである。墨書で「今ノ」(例「今ノ東叡山」という書き込み等)がみられ、朱筆による校正の跡もある。

【参考文献】

古板江戸図集成刊行会編『古板江戸図集成』中央公論美術出版、一九五

八年～一九六〇年

国立公文書館内閣文庫編『改訂 内閣文庫国書分類目録』(上・下・索引)

国立公文書館内閣文庫、一九七四～一九七六年

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、一九七九～一九九七年

国立公文書館編『内閣文庫百年史 増補版』汲古書院、一九八六年

飯田龍一、俵元昭『江戸図の歴史』築地書館、一九八八年

東京都編『安永三年小間附北方南方町鑑』(上・下)東京都、一九八九～一九九〇年

平井聖監修・波多野純著『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ(侍屋敷)』至文堂、一九九六年

平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系一三巻 東京都の地名』

平凡社、二〇〇二年

大石学編『江戸幕府大事典』吉川弘文館、二〇〇九年

(波多野 1996) 波多野純「一連の江戸図屏風を素材とした江戸の住まいと都市空間の復原的研究(2)——歴史資料としての都市図屏風——」『住宅総合研究財団研究年報』第三号、一九九六年)

(近松 1997) 近松鴻二「武州豊嶋郡江戸庄図」の基礎研究『東京都江戸

東京博物館研究報告』(第二号、一九九七年三月)

(加藤 1998) 加藤貴「寛永江戸図の再検討」『日本史攷究』二四巻、一九九八年)

(齋藤 2019) 齋藤慎一「慶長期の江戸城——慶長江戸図——」『江戸始図』の再検討』『東京都江戸東京博物館研究紀要』第九号、二〇一九年三月)

「東京都公文書館所蔵資料の構成——世田谷区玉川周辺地域関係資料展か

ら」『東京都公文書館だより』第二二号、二〇二二年一〇月

(調査員)